【ねがいましては】

平成２４年７月２３日　　*KYOWA SCHOOL*
第２６１号

「いじめの原因」

ここ毎日、滋賀県大津市の中学校で起こった生徒の自殺にまつわる報道が続いています。中学校へ警察が直接入っていくという考えられないことが起こっています。学校内部で起こった暴行事件についてなのだそうですが、かなり長い時間を経ていることも、学校や教育委員会の資質を疑われることになっています。

いじめと聞くと、私はすかさず「浦島太郎」を思い起こします。複数の子どもたちにいじめられていた亀を助ける場面は、正義の味方、かっこいい場面です。

某放送局の番組で教育評論家の方が語っていたことは、「教育の現場では学校ごとの評価を重要視する風潮が高まっている。そのため、各学校や各教育委員会が評価確保のため、内部で起こった事例をなるべく外へ出さないようにしていることが最大の要因ではないか・・・。」

確かに今回の自殺事件後、学校側はアンケート調査をおこなっていますが、その結果を絶対に外部へもらさないように「誓約書」を自殺したご両親に書かせています。その理由として、個人情報が含まれるため、その漏洩を防ぐためとしていますが、それは建前、隠ぺいの一手段と捉えられても仕方のないことだと思います。

さて、なぜいじめはなくならないのか・・・いろいろあるとは思うのですが、私の感じることを掲げます。

まず、あと何年か我慢していれば卒業、そうすればいじめてきた子ともさようなら、だから我慢しよう。今ここで親に話しても解決はしないし、もし話したことで、それが学校へ伝わりいじめの張本人に知られでもしたら、仕返しがこわいから。そう思っている子は相当数いると考えられます。次に、いじめは普通、集団によっておこなわれるケースが多いことです。ひとりでは何もできないでいるストレスのたまりきった子が、仲間をつくりいじめに移行する。いじめるほうも仲間意識を高めようと、さらにエスカレートした行動になっていく。いじめられても他へ漏らさないことが確認できると、さらにエスカレートしていく。

今の学校現場では、子どもたちは自らを守るために、ある行動をおこします。それはいじめられないようにする秘策です。そのひとつとして、自分は強いのだということを周りに知らせること。その方法として、自分より弱い子を探し、その子をいじめることで、自分の存在を周りに知らしめる。するとそれを見ていた若干強いと見られている子は、「あいつ結構強いヤツだからいじめるのはやめよう。」という意識を持つようになる。

そういった、ちから関係が自然に教室全体に広がっていく。彼らは常に目に見えない「ヨロイ」を自分にかぶせながら学校生活を送っているわけです。

ではなぜそのような心理が彼らの中に強くはびこってしまうのか。私はこう思うのです。

すべては「成績制度」のもたらしたもの。なぜか、子どもたちは小学校１年生より「成績」に敏感になり始めます。１００点は良くて、０点は悪い、１００点は頭が良くて、０点はバカ。０点を取る子は周りから馬鹿にされ、１００点を取る子は周りから尊敬のまなざしで見られる。そんな感覚がどの子の中にも自然に作り上げられていきます。そして、勝ち負けに繋がる成績が誕生します。テストを返されて、「となりの〇〇ちゃん、私より悪ければいいのになあ・・・」と、級友の不幸を平気で祈るこころがどんどん成長します。毎日の繰り返しは、やがてそのこころを当たり前としていきます。なぜなら、人の不幸を望む心は、人にばれなければ人には迷惑はかかっていないからです。

自然に宿ってしまったすさんだ心。そのこころを抱えたまま、彼らは思春期へと突入していきます。中学入学後、成績のあり方はさらにシビアな世界へと入ります。定期テストの点数によって順位が作成されます。これは、数字がもたらす子どもの心を決定的に「悪」へと転換させる好条件へ加速させます。まさにクラス全員が「敵」、学年全体が「敵」になります。毎日が「勝った負けた」の世界。思いやりややさしさなど、みじんも漂うことのない空間で彼らは生活することになります。

ここ KYOWA の空間に戻ります。テストなし、成績なし、宿題なし、あれだけ嫌だった勉強も、自分のスピードをしっかりと掴み取ると自然に加速、どんどんこころが前向きになっていく自分を感じ取ることができます。

私の口ぐせのひとつ、「私の評価はただひとつ、今、たった今をあなたが精一杯に生き切っているか、今が精一杯なら、それが１００点、もし、今回のテストであなたが今までにないくらいに精一杯の自分を発揮していたのなら、それが正真正銘の１００点です。おかあさんにブツブツ言われたら教えてね。『お子さんは、精一杯に取り組んでいましたよ。お子さんに罪はありません。しかられることなどひとつもありません。叱られなければならないのは栗田です。なぜなら、栗田の教え方が悪かったからです。』とね。」

私は常に子どもたちの目線の横にいてあげたいのです。安心していいからね、いつでも守ってあげるからね。ただ、楽や勉強からの逃げはよくないかも、オレのこころが離れていっちゃうからね・・・・・。

学校制度の在り方を根本から立て直すことは不可能に近いと思います。その制度に苦しめられている人たち、子ども、親、教師・・・・学校にかかわるすべての方々が被害者に見えてきます。やむなくいじめに走ろうとしている人たち、ほんの少しの『勇気』を持とうね。栗田はいつでも応援しています。